

高校ラグビー部員の「戦略」としてのスポーツ

— Z 高校の事例 —

甲斐 健人

はじめに

わが国では、明治以降の近代化と深く関わりながら「社会の成員の評価、選抜、配分の基準として学歴を重視する」学歴主義が台頭し、「学歴主義の支配的な社会」である学歴社会が成立したと考えられている⁽¹⁾。そして、学歴の社会的な意味は変化を見せながらも、現在も依然として学歴社会であることが指摘されている⁽²⁾。

体育・スポーツ社会学の「学歴社会と課外スポーツ」に関する領域では、学歴社会を前提として、スポーツの役割・機能に関する議論と、体育・スポーツを通して行なわれる管理主義教育の問題性に関する議論が行なわれてきた。さらに、学校運動部研究においても、タテ社会論の援用による平板で抽象的な議論が展開されてきたといつてよい⁽³⁾。

一方、教育社会学領域における生徒文化論、学校文化論においては、学校でまさしく生きる「高校生」を描き、それを理論化する努力が始められている⁽⁴⁾。このような動きは、高校生の現実の姿、リアリティに迫るという現実的要請に突き動かされて「類型化」論に代表されるような生徒の部分的把握から、事例研究による全体的な把握、文化的な理解へという方法的、認識論的な反省が底流にある。

体育・スポーツ社会学領域におけるそうした運動部員、部、社会の把握は、このような今日の社会学、教育社会学からの理論的な要請のみならず、高校生の生活現実からも遠いといわざるをえない。すなわち、学歴社会の影響を受けながらも、充実した高校生活を送りたいと意欲を燃やす高校生像は看過されてしまう。このような高校生像を把握するためには、ブルデュー(Bourdieu,P.)の

「文化資本論」が有効であろう。客観主義と主観主義との対立の理論的解消を試みたブルデュー理論は、体制を「我がものとしつつ」、自分なりにそれを変革していこうと「戦略」的に行動する主体像を含んでいる⁽⁵⁾。そして学校は「階級」の再生産装置であるとともに個人の「上昇」を可能にする戦略点ともなる[松村、1993]。

本稿の事例である、Z高校ラグビー部員は、このような「戦略」的行動を見せながら、部活動を継続しているのではないかと推定される。

本稿の目的は具体的には次の3点を分析することにある。①Z高校ラグビー部が、自主性を尊重し、醸成するようつくられた場所であること。②部活動を自然に継続していくような仕組みの中で、学校文化への批判的な気風が生み出されること。③3年生たちは、学歴社会という「場」の論理に「対抗」的ではなく、「抵抗」という姿勢をみせること⁽⁶⁾。そのために、大学受験目前まで部活動を継続した高校3年生に焦点をあてて分析を行ないたい⁽⁷⁾。

1. 概況と前史 — Z学園および同校ラグビー部 —

(1)概況

Z学園のあるY市は東京から50kmに位置し、約20年前までは田園地帯であった。この地域を大きく変えたのは研究学園都市構想である。現在では大学や研究機関も多く、道路の整備、住宅やショッピングセンター等の建設も行なわれている。こうした変化に伴って、大学生や研究者およびその家族などの移転も多く、住民が増加しており、人口は5市町村合併の結果、'92年現在約14万人であり、そのうち外国人登録者は約2000人(約1.4%)を越えている。一方で、市街地を一步離れると昔ながらの平地林、畑地、水田などが広がる田園風景が見られる。現在のZ学園は隣に公園と研究所、住宅などがあり、緑に囲まれている。

Z学園は1979年にT大学の同窓会を母体として作られた。中等教育批判に基づく「実験校」という性格をもつ男女共学の中等高等学校である。'82年3月

に1回生が高校を卒業した。同年4月から地元小学校からの推薦入学の生徒が入学する。同時に、高校生の募集を若干名とし、6年間一貫教育の体制ができあがった。'91年3月に初代校長が退任し、初代教頭が2代目の校長に就任した。'92年5月現在、生徒数1370名、教員数は校長以下常勤66名である。

Z学園の生徒は以前から地元に住んでいた人の子弟、研究所や大学の移転に伴いY市近郊に転居してきた研究者の子弟、近隣のベッドタウンに住むサラリーマンの子弟、学校に隣接する寮を利用して全国からやってくる生徒に大別することができる。一般的なサラリーマン世帯から推測すると学費他を賄うのは容易ではないだろう。ちなみに、'92年度の中学1年生は毎月の学費が37,150円、寮生の場合はさらに毎月70,725円が必要である。

(2) Z学園の学校文化

Z学園は「日本の学校教育は知識を与えるという点では優れているが、人間を育てるという意味では劣っている」という認識に基づいた実験校として誕生した。すなわち、Z学園の設立は学歴社会の中で「従来の中等教育には自分の生き方について正しい判断力をつけさせることが欠けていたのではないか」という反省に立った試みであった⁽⁸⁾。生徒のインプット（入学時の成績）とアウトプット（卒業後の進路）にばかり注目するのではなく、学校の過程で生徒が身につけていく「数字に現れないもの」にこそ可能性を見いだそうとするものであり、知識の伝達だけでは生徒に「生きる力」を身につけさせることはできないのではないかという強い信念があったといわれている。

開校当初は、学校の方針に賛同した教師、父兄、生徒が集まり、各々の立場で新しい学校を作り出そうとする雰囲気には溢れていたという。その際英国のパブリックスクールが一つのモデルとされ、Z学園はその日本的な姿を求めてきたといえる⁽⁹⁾。知育偏重を避け、社会で生きていくのに必要と思われる多様な知識や技術を身につける機会と試行錯誤する機会を提供することを重視した多様な教育が教科内外で行われている⁽¹⁰⁾。

ここで注意したいことは、Z学園の進路指導はいわゆる「受験指導」ではないことである。Z学園では進路指導を生徒指導（教科外指導）の一部と考え、重視している⁽¹¹⁾。進路指導は進路意識を明確にすることに重点が置かれてお

り、高校2年生は1年間で個人課題研究が課せられている。これは各人が自分の興味にそった課題を設定し研究する「卒業研究」というべきものである。さらに、高校3年の5月には各生徒が希望に応じて大学訪問を行う。並行して、進路指導部の先生と生徒との面接を通して、生徒の進路意識の成熟をうながす。進路指導を支えるシステムとして受験対策が授業を中心に工夫されている。正規の授業時間以外には、高校3年生の希望者を対象に夏休みに補習が行われる。進学の実績については、進路指導が偏差値によって進路を決定させる方針ではないために、いわゆる「難関大学」への入学者数や合格者数で単純に把握することはできない。

Z学園は現在では進学校として紹介されてもいる⁽¹²⁾。学校側も平成元年に、創立当初と比べて「受験競争」の影響を大きく受けている社会的状況を指摘し、授業内容の充実や6年一貫教育の長所を活かしたカリキュラムの再考などによって対応しようとしていることを明言している。現在では卒業生の大部分が進学し、進学状況や合格率は「上昇中」である(表1・2)。このことがZ学園

表1 進学状況

在籍者数	220
進学希望者数	219
4年制大学	138
短期大学	13
専門・専修学校	5
計(%)	156(70.9)

* '92.3卒業生 H. 5年度『入学案内』より
 に思わぬ影響をもたらしてきている。創立間もない頃のZ学園では、生徒の両親のほとんどが新しい学校への期待をこめてわが子を入学させていたという。

表2 進学率・合格率の推移

	合格率 %	進学率 %
1回生	—	38.8
2回生	—	48.1
3回生	48.9	38.8
4回生	62.5	53.5
5回生	62.8	54.6
6回生	64.5	57.6
7回生	67.0	63.9
8回生	66.3	58.6
9回生	68.8	63.3
10回生	71.4	67.4
11回生	77.2	70.9

* 『学園だより』

『入学案内』より作成

しかし近年では、従来同様に現在の教育に欠けているものをZ学園に求めている子供を入学させる父母と、校風に憧れたのではなく過去の進学の実績などから判断して子供を入学させる父母とに別れてきているようである。現在ではその割合はほぼ半分ずつということである。ある教諭は「『実験校』が段々失敗が許されなくなってきた」という。別の教諭は、学校づくりに燃えていたのは5、6回生ぐらいいまでで、「ルールの上に乗ればいいのが今の連中」と生徒の質の変化を指摘している⁽¹³⁾。また、新しい教育理念をもった教員が加入することによる教員側の変化を指摘する声も聞かれた。

生徒指導には生活指導の側面もある。「紳士たれ」という一言ですませたい理想はあったが、現実には細かい決まりが決められており、21ページに及ぶ冊子が各生徒に配られている。Z学園では、生徒指導は何か事件が起こった際処分さえすれば事足りるとは考えられていない。しかし、問題が生じた場合には公開で処分がなされ停学や退学も起こるといふ。決まりが多いことと学校行事が多いことに、生徒はある種の拘束感をもっているようにみうけられた。

(3)校内におけるラグビー部の位置

Z学園ではクラブ活動が盛んに行われている。学校側も、部活動への参加を教育活動の一部として奨励している。Z学園にはいわゆるスポーツ推薦制度はない。活動時間は平日は16:00から17:30まで、休日は9:00から16:30までとされており、原則として学期中の休日は練習しない⁽¹⁴⁾。Z学園の運動部は全国レベルまたは県のトップクラスの成績を残している部（バドミントン部、テニス部、ラグビー部）、県大会にはほぼ決まって出場する部、時に県大会出場を果たすがどちらかと言えば県内の地区大会の壁の厚さを感じさせられる部という3層に分けられる。いずれの部の場合も制度的な待遇は同じである。

ラグビーは校技でもあり、ラグビー部はZ学園では出色の運動部といえる。部活動を高校3年の冬まで続けるのはラグビー部員だけである⁽¹⁵⁾。国体代表や高校日本代表にも多くの生徒が選ばれている。生徒や教職員の応援も多い⁽¹⁶⁾。ラグビー部は開校1年目に創部。3年目に県大会初出場。5年目の'83年度に全国大会県予選2位（国体代表選手1名）。あと一步のところまで花園出場を逃す。翌年、5名の3年生が初めて最後の大会まで続けた。2度の県大会準優勝を乗り越え、'85年度に全国大会初出場。翌年、1名が初めてラグビー推薦で進学した。この頃から大学からラグビーに関係した推薦入学の申し出が来るようになった。しかし、当時の生徒の話によれば、彼らにはラグビーで進学しようとする雰囲気はなかったという。尚、その後全国大会には頻繁に出場している。

2. Z高校ラグビー部

(1)「教育」としての部活動

学校側にとっては部活動は教育の一部である。全国大会目前の12月7日から13日には、2年生が台湾研修旅行へ参加している。今年のチームではレギュラー6名、ベンチ入りする21名のうち10名を2年生が占めているが、学校行事が優先される。全国大会へ出発する際の壮行会や見送りなどは行われぬ。全国大会で好成績を残したときにも出迎えはなかった。'86年6月には、生徒の

公認欠席が多すぎることを指摘した「公式試合を土曜・日曜に組む請願書」を学校長と父母会会長がX県の高等学校連盟と高等学校長会に提出している。

創立以来、体育の教諭としてZ学園に勤務し、ラグビー部にに関わり、現在は高校ラグビー部の監督であるW先生はZ学園の教育方針について、「生徒の自主自律の精神を育てること。上からの統制でキチッとさせられるのは借物、生徒自身が学習を含め健康な生活習慣をつくれれば本物、これには時間がかかる」と公式に発言している。彼はラグビーによって、生徒が判断力をつけ、同時に、方針決定後の推進力をつけることができるという。彼はラグビーの能力を生かして進学する生徒はそれはそれで良いと考えているが、適性がない生徒がラグビーの継続を半ば義務づけられる進路をとることには反対である。ラグビーをしていたことで推薦入学の枠がある場合にも、純粋なラグビー推薦以外は、ラグビーの実力とは別に生徒としての評価に基づいて薦めるようにしている。また、W先生は生徒がラグビー推薦があるからと勉強しなくなることは望ましくないと考えている。今年の3年生のうち1人が怪我で、もう1人が学校の単位の問題で夏休み中の休部を命じられた。

教育としてラグビー部を捉えようとするW先生の指導方針は、生徒の自主性を尊重するという形で随所に表れている。全国大会の10日前の12月17日、18日には校内球技大会が行われた。その間の練習についてW先生は「キャプテンが決めるでしょ。多分、1日目は休むんじゃないかな」という。実際には1日目は2年生のレギュラー2名が自主的に練習していたが、全体の練習は2日とも行われなかった。翌日キャプテンは練習後、筆者に「充分休んだし、ラグビー頑張れますよ」と語った。

全国大会ではホテルに宿泊し、各自に個室が与えられた。練習と試合以外では食事とミーティングの時間が決められるだけで、その他の生活は完全に生徒各自の自由である。W先生は「普通のチームはあまり喜ばないんじゃないかな。7、8人の大部屋とかの方が管理しやすいでしょ。ミーティングするにも特別に場所が要るし。彼ら（生徒）はちゃんとしてるんです。多分してるでしょ。でも中にはいるでしょうね、自己管理できない奴も。それで負けたのかも」と語っている⁽¹⁷⁾。

(2)「遊び」としてのラグビー

現在の部員数はキャプテンによると「60人以上。」「高1の一部が入れ代わり休んでいる感じ」なので毎日約50人が練習に参加している（実際には部員は54人）。練習時間は平日は16:00から17:30、土曜日は14:00から17:00、日曜は必要に応じて練習や試合が行われる。時には練習に熱が入って30分程度延長されることもある。普段はグラウンドの反面を使い、月曜日、金曜日にはサッカー部と交代して、ラグビーのゴール裏のインゴール部分で練習する。グラウンドに照明施設はない。

さて、日々の練習を追ってみよう。16:00頃にグラウンドに生徒が集まり始める。各人が思い思いのウォーミングアップを行う。その中から簡単なゲーム形式のアップが始まり、一軍対二軍のゲーム形式の練習へ入っていく。その後、ポジション別の練習に移行し、最後に体力トレーニングが行われる。遅れた者は随時勝手に加わっていく。一軍対二軍のゲーム形式の練習以外は、レギュラー・非レギュラーの区別、学年の区別はなく、全員が一緒に練習する。練習中には生徒同士の会話が多い。他人が練習しているときに別の練習をしていたり、「立ち話」をする場面も見られる。

練習にはW先生やコーチが来ない日もある。彼らの服装はバラバラで、破れかかった服装の者もいれば、海外の有名なチームのユニフォームを着ている者もいる。部単位で統一されたジャージやウインドブレーカーは作っていない。全国大会の開会式では、数名が他校の生徒にジャージを借りて参加するハプニングも起こった。

彼らはラグビーについて「痛い。嫌い。…でも好きなんですよ」と語る。朝7:30頃から約1時間、ベンチ入りを目指して自主的に練習をする3年生が「ラグビーは苦しんでするものじゃない。ラグビーは遊びです。もし、毎日3、4時間練習して、根性や精神論を叩き込むような部だったら、やってないでしょうね。受験勉強の合間に仲間とじゃれあってるようなもんですよ」と語る。ある新聞記者は「（花園出場チームの中には）ラグビー専門のような学校も多いと思いますよ。緊張してビビッテルようなチームが多い感じです。Z高校は伸び伸びやっているとこの印象です」と、その雰囲気について語った⁽¹⁸⁾。

彼らは自分達を他のラグビー強豪校の生徒とは違うと思っている。「ウチが

一番幼いでしょ、花園に出るチームでは。」「(花園出場チームでは)僕らが一番ラグビーなめてますね、きっと。」という高校日本代表にも選ばれたC君の言葉は彼らのラグビーに対する姿勢を物語る。自分達の練習について「ババッとやってババッと終わって、練習は楽ですね。〇〇高校なんかは1日5時間くらいやっていますから。彼らはお仕事ですから」と言う者もいる。彼らのこのような態度をある教諭は「ラグビー馬鹿になりたくない、というプライド」と評した。Z高校のラグビー部員には「(自分達は)ラグビーに没頭しているわけではないんだ」という思いがある。それは練習の仕方や、プレーのスタイルや、服装などに表れてくる。彼らにとってラグビーは「楽しみ」であり「遊び」なのである⁽¹⁹⁾。

3. 高校3年生のラグビー部員

(1) 継続までのプロセス

18名の3年生が12月まで部活動を継続した。この時期レギュラーではない3年生が9人も残っているのはZ高校でも異例のことである。「今年の3年はすごく仲がいい」とW先生はいう。

Z学園のラグビー部員が退部する契機は普通、①中学から高校に進学する時期、②高2から高3に進級する時期、③高3の6月、である。彼らは中学時代に「試合中心で楽しくやっているうちに」3年の時に東日本の大会で優勝した。全国大会で活躍する高校ラグビー部に憧れ、ほとんどの生徒がその時点で花園を目指してラグビーを続けることを決心した。「ほとんどやめる奴がいなかったため、自然に続けていた」と語る生徒もいる。

18人のうち2人が高校進学後に退部を真剣に考えている。G君は3年進級を前に、両親から推薦入学を狙わないならば退部して受験勉強をするようにと言われた。彼は6月に一度、退部を決心した。この頃レギュラーから外れている。ある日、両親に「今日やめてくる」と言って登校したが、先生や部員と雑談をしているうちに言い出せなくなって、結局やめなかった。「いつも一緒にいる

友人がいなくなると寂しい」と思ったという。

P君は3年の夏休み前に「半強制的に」休部することになり、退部を考えた。しかし、中学1年の12月にサッカー部からラグビー部へ転部した時に、途中で止めた自分に納得できなかつた上に、世話になった人たちへ申し訳なかつたと随分後悔したので、結局最後まで続けることにした。他の者は全員、高校1年以後、真剣に退部を考えたことはない。高校ラグビー部に入った時点で最後の大会まで続けるのが当たり前だと思っていた生徒と、そんな意識すらなかつた生徒のどちらかである。

こうして18名が部活動を継続したわけだが、背後にはラグビーという種目の独自性に関わつた隠れたからくりが存在している。まず、彼らはZ学園入学後、中学時代からラグビーを始めている。小学生の間ではあまりラグビーは行なわれていない。また部活動以外でも、授業で毎週1、2時間ラグビーを行ない、さらに校技大会等も含めて、基礎的な練習量が確保され、同時にリーダーとしての経験も積むことになる。学校外に目を向けると、X県の中学校ではラグビー部は少数である。これらのことは、中学3年時の東日本大会での活躍に結びつきやすく、高校の先輩の活躍もあって、中学3年生に3年後の花園出場が見えてくることになる⁽²⁰⁾。そして中学3年の時点では高校卒業後の進路意識はあまり明確ではない。従つて彼らは中学3年の時点で、高校3年までの継続をある程度意識しながら高校ラグビー部への入部を決心するのである。また、ラグビーの場合は高校の単独チーム単位で出場する全国大会は一つしかないことも、彼らの花園への思いを強めているのかもしれない。加えて、彼らのほとんどがZ学園入学後に初めてラグビーを経験することによってZ学園ラグビーに溶け込み、彼らの間にZ学園ラグビーへの誇りが醸成されていることも見逃してはならないだろう⁽²¹⁾。

ところで、校技にラグビーを選んだのは、全くの偶然であつた。初代校長の学校全体で共通の話題を持てるように校技を決定しようという提案に、当初はサッカーが候補に上がつてた。しかしながら指導者が不在であつたために、W先生がいるラグビーに決定したという経緯があつた。

(2)ラグビー部員の学校文化批判

彼らも大学進学を希望している。しかし彼らは進学のためだけに高校時代を送るつもりはなく、3年の12月まで部活動を継続した。学校生活に対する彼らの姿勢は学校や受験勉強に邁進している（ように見える）生徒達への疑問として表現される。

E 「一回しかないから、勉強だけで青春終わらせたくないな。」

「（現在小学校5年の弟について：括弧内筆者加筆）Z学園には入ってほしくないですね。ここはラグビーしかないから。ラグビーなかったら悲惨ですよ。…ここは楽しみがない。勉強するためだけに学校にきて、帰るだけなんて悲惨ですよ。」

H 「（Z高校の生徒が）学校の（進学実績に）関する争いのために、学校に乗せられて受験勉強やってる。自分は嫌だな。」

「勉強だけじゃない、ということで（ラグビーをやって）得るものがあった。」

「部活やんないほうが（勉強は）できると思う。多少はできると思う。今、止めてまで、受験勉強というのは考えられない。」

I 「学校（の成績）が少し下がっても、（ラグビーを）続けたほうが良い。高校生活は一度しかないので、こういうときにできることをしておきたい。でないと、後々後悔するのではないか。」

M 「（受験に関して焦りはないのか）」という筆者の質問に答えて「ありますよ。英語の語彙力が低いんです。長文も皆は辞書なしだけど、僕は辞書ひくし。」

「ラグビーやめないのは面白いからと受験勉強だけしたのでは高校生活が駄目だと思うから。興味のあることをするのが一番良いと思う。」

O 「受験勉強をガリガリするのがうち（Z高校）の特徴だと思う。」

「（自分は）ラグビーを続けることができ、特別に受験勉強もせずに（大学）進学も果すことができ、Z学園にきて充実した高校生活を過ごすことができた。」

彼らとて、進学問題に関して不安もあり、心配もしている。「難関校」への合格をめざすF君は、普段は人より時間が少ないのでその分集中して勉強する

ようにしているという。彼にとってはラグビーをすることは友人と「楽しくじやれている」ようなものだという。H君は「欲張りかもしれないけど、両方やりたい」という。花園に出たいという気持ちと、ラグビーが好きだという気持ちを持ち続けてきた。他の強豪校ほど激しい練習をしないでも花園が狙えることも、部活動継続を容易にする要因となっている。高校2年の11月に頸骨を捻挫し、現在は首に負担のかかるプレーを禁止されているQ君は、今(12月現在)は「夏終わってやめちゃえば(良かった)」と思うこともあるという。当時は、やめれば多少は勉強ができるだろうと思ったが、やめる気になれなかった。彼は医学部を志望しており、現在の成績では現役合格は難しいと考えているが、試合や十分な練習はできないにもかかわらず、毎日練習に参加している。

Z学園は決して受験指導にだけ力を入れている学校ではない。しかし彼らはZ学園に対しても受験指導の色彩が強いと批判を投げ掛ける⁽²²⁾。そして、一度しかない高校時代を受験のためだけに費やしたくないと主張する。彼らの批判がどのような状況判断に基づくものか、以下、大学入試、大学生活や職業についての彼らの態度に言及する。

4. 大学入試と「戦略」としての推薦制度

18名の3年生のうち、結果的には13名が現役で大学に進学、残りの5名が浪人である。Z高校には純粋に「ラグビー(スポーツ)推薦」で進学する生徒はほとんどいない。ラグビーが義務になることを嫌うからである。以下、彼らが部活動を継続したと推薦入学とを結びつけて考えていないことを示すために、それらの間にある経緯を追跡したい。

まず、彼らが推薦入学を意識して入部したのではないことを確認しておく(表3)。

表3 ラグビー部3年生のZ学園中学入学理由、ラグビー部入部動機、希望職業

氏名	入学理由	入部動機	希望職業
A	ラグビーをやりたくて	憧れて(TV ¹⁾)	海外で仕事をしたい
B	公立校は柄が悪い・ポーズ ²⁾	友人の多くが入ったから	獣医
C			体育の教師
D	受験がない・ポーズ	友達と	家業(食品会社経営) を継ぐ
E	近場・他は落ちた	友人の勧め	公認会計士・税理士
F	姉、兄の影響		研究職・教師
G	両親の方針	両親の勧め	会社経営者
H	両親の方針	TV	医者
I	兄の影響・ポーズ	TV	エンジニア・研究職
J	両親の勧め	寮の先輩の影響・楽	牧場主(馬関係の仕事)
K	両親の勧め	両親の勧め	パイロット
L	両親の勧め	先輩に誘われて	公認会計士
M	両親の方針	先輩に誘われて	
N	兄の影響	兄の影響	獣医
O	近く・ポーズ	15人なら試合に出る可能性が高い	研究職
P	自由になりたかった	強くなりたい・友人に誘われて	医者
Q	父の勧め	友人に誘われて	医者
R	両親の方針	兄の勧め	医者

注1)小学校時代にTVを通してZ学園ラグビー部の活躍を知っていた

2)公立中学校がポーズ頭だったから (聞き取り調査より)

さて、18名の3年生を1991年12月現在の推薦出願状況とレギュラー・非レギュラーで整理したのが図1である⁽²³⁾。13人が推薦入試を出願しており、レギュラーは全員出願したことがわかる。ここで、同年6月の推薦出願希望状況とレギュラー・非レギュラーについて示した図2に注目する⁽²⁴⁾。高校3年の6月は退部する最後の契機であり、この時点での推薦希望者以外は、一般受験を予定していることになる。この時期、推薦を考えていた生徒（以下、推薦希望者）は、どちらとも断定しにくいA君とL君を含めて7人。他の10人は

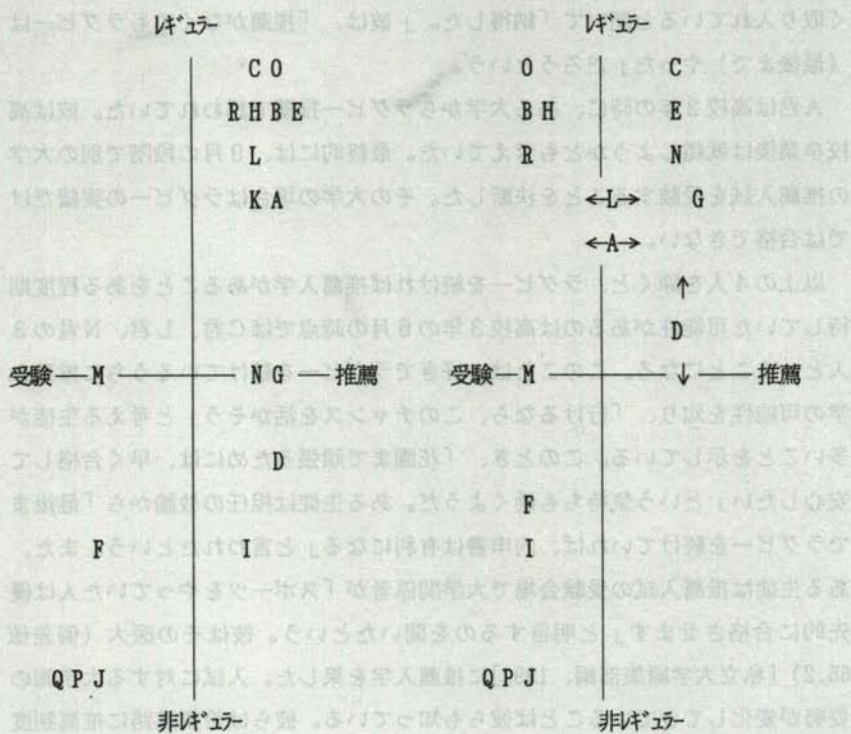


図1 推薦入試出願状況とレギュラー・非レギュラーの状況 (1991年12月) 図2 推薦入試出願状況とレギュラー・非レギュラーの状況 (1991年6月)

*C, D, Oはスポーツ(ラグビー)推薦 *Kは海外留学中
(聞き取り調査より) (聞き取り調査より)

推薦入試を見込んでラグビーを続けていたわけではないことが判る。推薦希望者7人の中で、E君は前述のG君同様に、ラグビーまたは受験勉強のいずれかに集中するようにいわれた。両親との話し合いの結果、「ラグビーしたいから、推薦にした。」

D君は推薦で進学しようと考えていたものの、夏休み後に、推薦で出願できる大学が彼の希望大学ではなかったために、推薦入試に出願するか否か、推薦を勧める両親と1、2週間もめた。彼は目標大学を受験して「玉砕して浪人しても良い」と思った。結局、推薦入試を出願できる大学がゼミ形式の授業を多く取り入れていると聞いて「納得した。」彼は、「推薦がなくてもラグビーは（最後まで）やった」だろうという。

A君は高校2年の時に、ある大学からラグビー推薦で誘われていた。彼は高校卒業後は就職しようかとも考えていた。最終的には、9月の段階で別の大学の推薦入試を受験することを決断した。その大学の場合はラグビーの実績だけでは合格できない。

以上の4人を除くと、ラグビーを続ければ推薦入学があることをある程度期待していた可能性があるのは高校3年の6月の時点ではC君、L君、N君の3人ということになる。このことは、好きでラグビーを続けているうちに推薦入学の可能性を知り、「行けるなら、このチャンスを活かそう」と考える生徒が多いことを示している。このとき、「花園まで頑張るためには、早く合格して安心したい」という気持ちも働くようだ。ある生徒は担任の教諭から「最後までラグビーを続けていれば、内申書は有利になる」と言われたという。また、ある生徒は推薦入試の受験会場で大学関係者が「スポーツをやっていた人は優先的に合格させます」と明言するのを聞いたという。彼はその医大（偏差値65.2）[私立大学編集部編、1992]に推薦入学を果たした。入試に対する大学側の姿勢が変化してきていることは彼らも知っている。彼らは希望進路に推薦制度があれば、うまく「利用」しようとする⁽²⁵⁾。逆に、進学のためにラグビーを続け、自分の専攻を推薦制度のあるところに合わせる、つまり、大学側の制度に自分の進路を合わせるケースは少ないのである。

ラグビー部員のほとんどが、希望進路を自分の将来の目標と関わらせて決定する。その時点で、大学に入って何をしたいかというイメージは彼らなりにつ

かんでいるという。彼らの多くは「大学に行ったら勉強したい」と考えている。推薦入学の生徒たちは、入学後に「ついていけない」と困ると各人なりに危機感をもっていた。「大学で勉強すれば、高校時代に受験勉強ばかりで疲れて入学した人よりは最終的には勉強の成績も上がる」という発言もあった。

彼らの希望職業は多様である(表3、前掲)。「資格を取る」進路を望んでいる者が多い。E君は「公認会計士になりたい。資格さえ取れば、学歴や出身大学に関係ないから。」「東大とか早慶なんか(の出身者)は(一流企業に)就職しちゃうから。その人達と競争することもないし」と語る。O君はこれからは高校時代に大学の受験勉強だけしているのでは駄目だと語る。彼は研究職にある父親の影響を強く受け、いわゆるエリートと呼ばれる人達に自分で新しいものを作る努力が不足していると考えており、創造性を身につけるためにも、たとえ浪人することになってもスポーツは続けるつもりであったという。彼は大学では勉強を中心にして生活したいと考えており、将来は研究職につきたいとも考えている。

前者は、学歴社会において自分のキャリアでやって行けるような方向を見つけている。後者は、学歴社会の問題性に気付き、これからの新しい生き方を追求しようとしている。すなわち、彼らは現代の学歴社会の中で、その特徴を見抜き、学歴獲得競争にのめり込まなくてもすむように、自分の人生を設計しているのである。

むすびにかえて

Z高校ラグビー部の3年生は、高校時代を受験勉強だけでは終わらせたくないと思い、ラグビーを生きがいとして打ち込んでいた。しかし彼らにとってはラグビーは「遊び」であり、ラグビー部で活動することで高校時代を「楽しく」すごしたいと考えていた。同時に彼らはZ学園の学校文化を受験に偏りすぎていると批判する力を養っていたのである。彼らは学歴社会を自分のものとして受け入れながらも、その圧力をずらしながら生きようとしていた。Z学園ラグ

一部は「抵抗」文化を醸成する場所となっていたのである。それは、学歴社会の波に揉まれながら自らの生きる道を模索するZ学園の狙っていた教育の賜かもしれない。本稿は学歴主義の相対化という論点から今日の学校教育の突破口を模索しようとする試みに対して、一運動部の実践に基づいた実証の試みであった⁽²⁶⁾。筆者の高校運動部研究は、学校文化研究の周縁的領域に自らの足場をおき、「学歴社会」や学校教育を再考する、新たな「体育社会学」を志向するものである⁽²⁷⁾。

付記

本稿の執筆にあたっては黄順姫先生（筑波大学・社会科学系）から貴重なご助言をいただきました。記して感謝いたします。

〈注〉

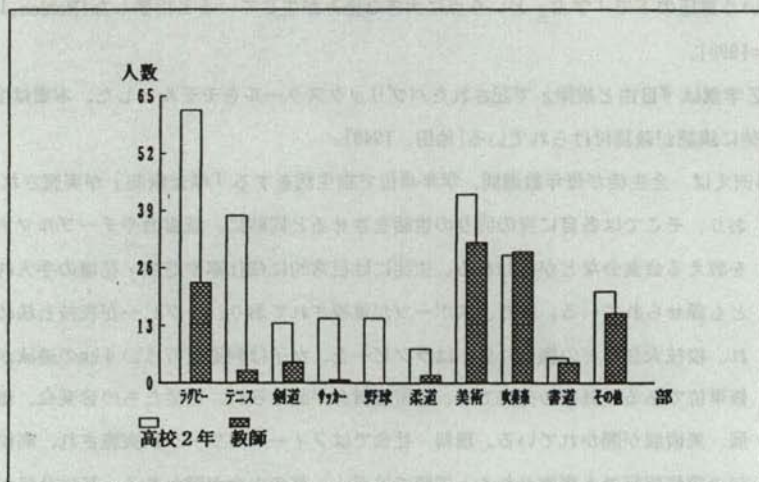
- (1)天野は、現代を成熟した学歴社会とみなし、学歴主義の浸透を近代化と関連づけて論じている[天野、1983]。学歴とは「学校教育に関する個人の履歴」のこと。学歴、学歴主義については[森岡ほか編、1993:168]参照。
- (2)藤田[1991]は学歴の積極的重要性（立身出世のための手段としての学歴取得）が拡散し、消極的重要性（「落伍者にならない」ための学歴取得）が増大していることを指摘している。なお、ある予備校の人数、学校数の変化は表4（表4は〈注〉末尾に掲載）。
- (3)拙稿「学歴社会における高校運動部への社会学的アプローチ—教育的『戦略』としてのスポーツの可能性に向けて—」『体育学研究』39-4(1994)。
なお、本稿は拙稿「『経歴』としての課外スポーツ活動に関する社会学的実証研究」（修士論文、未公刊、1993）の実証部分を加筆修正したものである。調査の詳細は修士論文に報告している。
- (4)例えば、[耳塚、1980]、[志水、1987]、[志水・徳田編、1991]など。
- (5)「戦略」論については[ブルデュー、1987=1988]、[小松田、1991]を参照。

- (6)松田は、琵琶湖畔の村と北部タイの村を例に、大資本という「異質で巨大な圧力」に対して「同じ土俵にたつて」正面から対抗するのではなく、「生活の便宜」にその源泉を求めながら抵抗する地域住民の生活実践に注目した[松田、1989]。
- (7)調査は1991年6月から1992年12月にわたり行なわれた。その間、大阪の全国大会にも2度同行した。尚、高校2年生全生徒を対象とした質問紙調査に関しては学校側から様々な示唆をいただいた。その理由は、学校の守秘義務の遵守である。現実的にも進路の問題を質問紙で問うことは不可能であるし、生徒の気持ちを考えると許可できない。高校2年生の段階では、進路希望は不確定性を大きく残している。また、質問紙の結果によって“まちがった”Z学園像を描かれることへの危惧があった。その指導に従って、進路希望、家庭環境、入学の理由、学校への希望等に関する質問紙調査は行なわなかった。
- (8)わが国の中等教育へのこのような批判は多くの研究で指摘されている。例えばローレン(Rohlen, T.)は日本の5つの高校での事例研究から、日本の高校では受験戦争という重圧の下で「学ぶ」という点に大きな歪みが生じていると指摘した[Rohlen, 1983=1990]。
- (9)Z学園は『自由と規律』で記されたパブリックスクールをモデルとした。本書は全生徒に講読が義務付けられている[池田、1949]。
- (10)例えば、全生徒が毎年数週間、学年単位で寮生活をする「準全寮制」が実施されており、そこでは各自に身の回りの世話をさせると同時に、読書会やテーブルマナーを教える会食会などが行われる。生徒には日常的に畑仕事や芝生・花壇の手入れなども課せられている。また、スポーツが重視されており、ラグビーが校技と決められ、校技大会などの機会に男子はラグビーを、女子は剣道を行う。4kmの遠泳が必修単位である。芸術の分野では、芸術鑑賞会が設けられ、生徒たちの音楽会、書道展、美術展が開かれている。理科・社会ではフィールドワークが実施され、高校2年の研修旅行でも実施される。国語では百人一首の大会が開かれる。英検2級が必修単位になっている。
- (11)生徒指導は「生徒の能力・興味・適性を把握し、将来の仕事に繋がる」ことを目的とし、Z学園の教育の中核にすえられている。問題児を排除するためのものではない。
- (12)例えば、1991年2月5日付、読売新聞。

- (13) 創立当初は教諭が父兄に対して学歴の話をするに「怒られた」という。現在では、地区毎に行なわれる父兄会では、受験の話強く要求する地区とあまり歓迎しない地区があるという。
- (14) 公式戦が3週間に以内にある場合や、練習試合などに関してはこの限りではない。
- (15) 5、6年前にサッカー部員が3年生の秋の大会まで継続しようとしたことがあった。その学年のチームは県大会には出場している。6月まで8人いた3年生のうち継続を希望したのは結果的には1名のみで、彼は十分な活動はできなかったという。
- (16) 県大会決勝戦は平日に行われる。高校3年生の希望者が学校が用意したバスで応援に行く。今年はおよそ200人が参加した。高校2年生と教師を対象に、自分が所属していない部の試合・発表等に行った経験をきいたアンケートの結果が図3である。

図3 所属以外の部で発表・試合を見に行った経験がある部(単位:人)

*野球は軟式で同好会(質問紙調査より)



- (17) 生徒の自主性に任せるやり方は、乙学園の教育全体に当てはまるものとは言えないだろう。部活動は学校制度の中にあつて、教師の裁量権が相対的に大きい領域ではないだろうか。

- (18)1991年12月27日、花園ラグビー場にて。
- (19)大学でも活躍し、現在Z学園の非常勤講師でコーチを勤めるOBは次のように語っている。「もっと『人よりも練習して、試合に出よう』とか思ってやってくれるといいんですけど、みんなと同じくらいやるというか。指導する側としては迷うんですよ。もっと厳しくやったほうがいいんですけど。厳しくするにはどうも…。だから何も言わないです。」
- (20)1993年4月26日の朝日新聞X県版では、「高校ラグビー人気いま一つ」と題し、加盟51校のうち18校が不参加であることが報じられた。そこでは中高一貫教育校が有利であること、サッカーやバスケットボールと比べて少年レベルでの競技人口の拡大ができていないことなどが指摘されている。
- (21)小学校時代にZ高校ラグビー部の試合をテレビでみてあこがれていたという生徒もいる。ここでもマスメディアの影響が大きいことを指摘できよう(表3、前掲)。
- (22)研究旅行、芸術鑑賞などができて本当に良かったという、Z学園の学校文化に対して肯定的な発言もあった。しかし、肯定した部分は受験指導に関してはない。
- (23)推薦出願者には校内の選抜の段階で不合格になった生徒も含まれている。
- (24)K君は当時海外留学中であった。留学中は進学については考えていなかったという。
- (25)推薦制度を「利用」する彼らの行為についてはブルデュエの「戦略」概念が理解の一助となろう。以下に述べるO君の場合は典型的な事例と考えられる。高校日本代表にも選ばれたO君はラグビーの経歴を活かしてラグビーでも有名な私立大学(以下、U大学)に推薦入学を果たした。彼は元々エネルギー問題や環境問題に関心があり、国立大学2校とU大学の受験を考えていた。父親の勧めもあり、たとえ浪人することになってもラグビーは最後まで続けるつもりでいた。従来理系系は推薦がほとんどなかったので、推薦による進学は考えていなかった。3年の夏休みになって、U大学の希望学部でラグビー経験者への一般公募の推薦枠があることがZ高校に連絡された。「ラグビーを武器にして」進学しようと決めたのは夏休みが終わってからである。尚、彼はU大学入学当初はラグビー部に所属していたようだが、1年の途中からサークルでラグビーをしている。
- (26)久富は地域と学校という視点から学歴主義の相対化について論じている[久富、1993]。
- (27)このような試みは、教育社会学の生徒文化論における欠落点を補うことにもつながっていくであろう。今後はいわゆる「底辺校」の事例研究が必要と考えている。

表4 18歳人口、V予備校浪人生入学者数、V予備校学校数の変化

年度	18歳人口(万人)	浪人生入学者数(人)	学校数(校)
1983	172	30,000	7
1984	168	33,000	8
1985	156	36,000	12
1986	185	42,000	14
1987	188	55,000	19
1988	188	67,000	23
1989	193	75,000	24
1990	201	78,000	26
1991	204	82,000	29
1992	205	88,000	31
1993	198	88,000	31
1994 ¹⁾	186	80,000	31
1995	177		
1996	173		
1997	168		
1998	162		
1999	154		
2000	151		

1)1994年度以降は推定。V予備校資料より作成。

〈文献〉

- 天野 郁夫 1983 『試験の社会史—近代日本の試験・教育・社会』 東大出版。
- Bourdieu, P. 1987 *Choses dites* Minuit. = 1988 石崎晴己訳『構造と実践』 新評論。
- 藤田 英典 1991 『子ども・学校・社会—豊かさのアイロニーのなかで—』 東大出版。
- 黄 順姫 1993 「象徴戦略による学校文化の再生産過程—S高校の事例を通して—」
筑波大学社会学研究室編『社会学ジャーナル』18:51-77。
- 池田 深 1949 『自由と規律 —イギリスの学校生活—』 岩波書店。
- 小松田 儀貞 1991 「ブルデュー社会学における『戦略』論の原像—構造と行為をつなぐ契機—」 東北社会学研究会編『社会学研究』57:135-158。
- 久富 善之 1993 「学校の生活秩序の組みかえ」 教育科学研究会『現代社会と教育』編集委員会編『現代社会と教育3学校』 大月書店。
- 松田 素二 1989 「必然から便宜へ—生活環境主義の認識論—」 鳥越 皓之編『環境問題の社会理論 —生活環境主義の立場から—』 御茶の水書房。
- 松村 和則 1993 「P.ブルデューの『スポーツの社会学』」 『地域づくりとスポーツの社会学』 道和書院。
- 耳塚 寛明 1980 「生徒文化の分化に関する研究」 『教育社会学研究』35:111-122。
- 森岡清美ほか編 1993 『新社会学辞典』 有斐閣。
- Rohlen, T.P. 1983 *Japan's High Schools*, University of California Press.
= 1988, 友田 泰正訳『日本の学校—成功と代償—』 サイマル出版。
- 志水 宏吉 1987 「学校の成層性と生徒の分化—学校文化論への視角—」 『教育社会学研究』42:167-181。
- 志水 宏吉・徳田 耕造編 1991 『よみがえれ公立中学—尼崎市立「南」中学校のエスノグラフィー』 有信堂。
- 私立大学編集部編 1992 『私大ランキング』 研数学館。

(かい たけと／筑波大学大学院)